

## “語り継ぐ大切さ”

国立病院機構栃木病院 菊池 進

本誌「医療」は戦後スタートし、現在61巻が刊行中である。そして、わが国は今年で戦後62年を迎える。戦後生まれが大半になった今多くの犠牲を出した戦争を考える時が来た。私自身も戦後生まれであり、戦争の歴史を知ったのは親からそして職場の大先輩からであったり、本であったり、映画であったりした。戦争を体験してきた多くの大先輩の方々はすでに亡くなっている。今でも懐かしく思い出されるのが宴会の終わり頃になると自然と歌われた「同期の桜」であった。今思えば脳裏に焼き付いている仲間のことを思い浮かべながら大きな声を出すことで涙をこらえていたのかと思えてならない。

広島・長崎に原爆が投下され、そして終戦を迎えたその原爆の日が今年もめぐってきた。この痛ましい体験が若い世代から忘れ去られそうになっている。

あるテレビニュースの中で街を行き交う若者にこの日は何の日か知っていますかの問いかけに誰一人として答えられる者がいなかった。大げさかもしれないが日本が戦争をしたことそのものを知らない世代である。若者にとっては、今の日本は何不自由なくものを手に入れることができる世の中、60年前の出来事など知らなくても良い、いや知ろうとしないのかもかもしれません。

戦争体験者の高齢化が進む中、若者へ体験を風化させないために思い出したくない過去を語り伝えていこうという方々がいる。スティーブンオカザキ監督の「ヒロシマナガサキ」を観ましたが、ドキュメンタリータッチで被ばく者の方々と原爆を投下した搭乗員の証言でつづられている。被ばく者は、当時

10歳から15歳で、今は平均年齢が76歳という高齢者になっている。被ばく者の証言の中に、今でもはっきりと再現できるほど当時のことを鮮明に覚えている方もあり、皆さんは「ピカドン」と言っていますが、実際には閃光が走り、きこの雲と言われているのは火柱であり、爆心から円を描くように外側へ一気に走ったそうです。半径1キロ以内は80%が即死、約1.5キロ範囲は50%が死亡、街は瓦礫と化したそうです。このとき発生したエネルギーのうち約15%が放射能に、約35%が熱線に、残り50%が爆風のエネルギーになったそうです。被ばく者として原爆のもたらした“この世の地獄”を所詮、遭うとらん者にはわかるものではないと思いつつも、しかし、わかってももらいたいと願い「何とか伝えなければ」と記憶を残そうとする。また、各地から庶民の体験を永遠に語り続け、記録すれば体験は生き続けると、高齢にもかかわらず各地の学校に出向いて子供たちに語り伝えている方がいる。戦争を語り継ぐというのは、簡単なものではない。本当に少なくなった体験者が残す証言こそが大切であり真実なのです。

戦争を知らない者が話をするのは非常におこがましいかもしれないが、完全に消し去られた後では物語になってしまう。唯一の被ばく国である日本「長崎を最後の被ばく地」と願い、平和を祈る気持ちを若者の心の中に語り継いでいって欲しい。

私は、本年4月から「医療」編集委員として参加している。本誌には戦後60年、国民医療に捧げた先輩諸氏の祈りが語り継がれて来たし、今後もそうあって欲しい。